

私立大学保育者養成学部における入試区分と卒業後の進路との関連 (II)

竹内 聖彦 (椋山女学園大学)

都市部中規模私立大学教育学部の保育者養成コースにおける学生の特性の入試区分による違いを学生の将来設計や職業観と進路選択とに関連付けて検証した。その結果、大学生活における活動志向に関しては、推薦入学生は一般入学生と比べて学修活動への志向性が弱い一方で、社会活動については推薦入学生の方が活発な活動を望む傾向があるが、意識の低い学生も一定数含まれた。将来設計に関する意識の高い学生は公立保育職や公立小学校教員を目指す傾向が強く、公立小学校教員志望となった学生は入学時からフルタイムでの働き方を望んでいたことが認められた。

キーワード：追跡調査、保育者養成、入試区分、進路選択

1 はじめに

多くの私立大学は教育機会の多様性を求める社会的状況により様々な入試区分により学生募集を行っている。それら入試区分は学力試験を中心とする一般入試と人物評価を重視する推薦入試とに大きく二分され、一般入学生と推薦入学生には基礎学力、勉学意欲、将来像等に差があると言われている。

国立大学に関しては、林 (2012) の山口大学での調査により、推薦入試入学生の TOEIC 最高スコア平均点が低いこと、卒業時の学業成績を全体 GPA、TOEIC 最高スコアで見ると大学入試センター試験を課さない入試区分の入学生が相対的に低いことが示されており、石井 (2012, 2014, 2017) の文系学部における調査により、一般入学生には学習意欲の低い学生がいるが推薦入学生にはいないこと (石井, 2012)、推薦入試受験者の高校偏差値分布は一般入試受験者の分布より低い位置にあり、推薦入試が相対的に学力の低い志願者のための入試となっていること (石井, 2014)、卒業後の進路については公務員等になる割合が一般入学生において大きく、留学する学生の割合は推薦入学生において大きいこと (石井, 2017) などが示されている。

私立大学に関しては、中規模私立大学教育学部の教員養成コースにおける入試区分と卒業後の進路との関連についての調査報告 (竹内, 2019) がある。教員養成を目的とする学部学科においては、入学者はほとんどが卒業後に教員として社会に貢献することを目指しており、その目標である教員採用試験の合格状況を学生の質を測る指標として利用することで、入試区分を中心に学生の質について考察した結果、採用試験合格状況は入試区分との関連よりもむしろ大学での学業成績との関連の大きさが示唆されている。

同様に保育者養成コースにおいては、入学者のほとんどが卒業後の進路に保育者として乳幼児と関わる公

私立の保育園・幼稚園への就職を志望するが、入試区分との関連をみた調査 (竹内, 2020) によれば、国公立大学受験者の受け皿となるような入試区分による入学生は、私立保育園・幼稚園への就職を避ける傾向のあることが見出されるとともに、学業成績の面では推薦入学生は一般入学生より高等学校における評定平均値が高いものの大学での GPA では差のないことが示された。竹内 (2020) の調査では中規模私立大学の保育者養成コースの学生を対象として入試区分による学生の質について学業成績及び進路選択との関連を中心に扱っているが、進路選択は学生個人の将来設計と直接関係する。そのため本稿では、各入試区分入学者自身の思い描く将来像の違い、あるいはまた、それが進路選択に与える影響について考察したい。

2 調査対象学部と学生の状況

2.1 調査対象と調査方法

調査対象学部は、名古屋市東部の文教地区に位置する中規模私立女子大学 (2020 年 5 月現在の収容定員 5467 名、在籍学生 6022 名) の教育学部であり、2020 年現在の入学定員は 170 名 (保育・初等教育専修 90 名、初等中等教育専修 80 名) である。保育士資格取得を目指す「保育・初等教育専修」は幼稚園教諭免許状取得が、「初等中等教育専修」は小学校教諭免許状取得がそれぞれ卒業要件となっており、卒業後は大多数が保育士・幼稚園教諭・小学校教諭としての就職を希望する。

調査対象学生は 2012 年度入学 2015 年度卒業 169 名 (保育・初等教育専修 80 名、初等中等教育専修 89 名) および 2014 年度入学 2017 年度卒業 161 名 (保育・初等教育専修 86 名、初等中等教育専修 75 名) である (いずれの年度も入学定員は両専修とも 80 名で、卒業生数には編入学生及び留年学生は含んでいない)。

このうち本研究では保育者養成を目的とする「保育・初等教育専修」(以後対象コースと呼ぶ)の学生 166 名(2012 年度入学生 80 名, 2014 年度入学生 86 名)を調査対象とし, 入学時のアンケート調査による大学への入学目的や将来像等の特性を入試区分ごとに比較し, 卒業後の進路選択との関連も含めて入試区分による学生の特徴を探る。

2.2 調査対象コースの入試区分

調査対象コースの入試区分と募集定員(表 1)は, 推薦入試が「併設校¹⁾制推薦入試」20 名, 「指定校制推薦入試」20 名の 2 区分の合計 40 名, 一般入試²⁾が大学個別入試である「一般入試 A (2 教科型)」20 名, 「一般入試 B (1 教科型)」3 名, 「一般入試 B (2 教科型)」3 名, センター利用型入試である「センター利用入試 A (3 教科型)」2 名, 「センター利用入試 B (2 教科型)」1 名, 複合型入試³⁾である「一般入試 A (プラスセンター型)」10 名の 6 区分 39 名, その他の入試区分が「社会人特別選抜」1 名である。

表 1 には調査対象コースの入試区分別学生数(卒業生数(入学者数))も同時に示す。国立大学あるいは他の私立大学との併願受験者の多い私立大学においては, 一般入試区分合格者の他大学への流出等により歩留まり率の変化が大きだけでなく, 受験生の心理的事情や保護者の経済的状況により推薦入試区分応募者が大きく増減することもある。その結果, 極端な定員超過

表 1 入試区分別募集人員及び卒業生数(入学者数)

入 試 区 分		募集定員	2012年度	2014年度
推 薦	併設校制推薦入試	20	20 (20)	20 (20)
	指定校制推薦入試	20	29 (29)	14 (14)
一 般	一般入試 A (2 教科型)	20	20 (21)	34 (35)
	一般入試 A (プラスセンター型)	10	6 (7)	7 (7)
	一般入試 B (1 教科型)	3	2 (2)	4 (4)
	一般入試 B (2 教科型)	3	3 (3)	4 (4)
	センター利用入試 A (3 教科型)	2	0 (0)	1 (1)
	センター利用入試 B (2 教科型)	1	0 (0)	2 (2)
社会人特別選抜	1	0 (0)	0 (0)	
合 計		80	80 (82)	86 (87)

となったり逆に追加合格による補充が間に合わず欠員を生じたりする事態も起こりうる。しかしながら調査対象コースの調査対象学年である 2012 年度, 2014 年度は入試区分ごとの定員充足の偏りはあるものの入学者全体としては適度な人数となっている(表 1 括弧内)。留年退学などの事情でこれらの学年の 4 年後の卒業者はそれぞれ 80 名, 86 名となっている(表 1)。

本稿では竹内(2020)の調査と同様に, 多数ある一般入試区分のうち「一般入試 A (2 教科型)」を除く 5 区分と「社会人特別選抜」とを併せて「一般 B 他」と呼ぶこととする。「社会人特別選抜」枠の入学生は対象年度には 1 名もないため「一般入試 A (2 教科型)」(以下略称「一般 A」を用いる)以外の一般入試区分の総称と考えて差し支えない。こうして対象コースの入試区分を「併設校推薦」「指定校推薦」「一般 A」「一般 B 他」の各募集定員 20 名の 4 区分と考え, それぞれの特徴を考察する。

2.3 入試区分別学業成績と進路選択状況

竹内(2020)によれば高等学校及び大学での学業成績に関しては, 対象コース学生全体では高等学校評定平均値と大学での GPA とには中程度の相関がある一方で, 入試区分別には指定校制推薦入試による入学生のみ相関の程度が低く, 推薦入学生は一般入学生より評定平均値が高いものの GPA では差が見られなかった。指定校制推薦入試区分の学生の高等学校での評定平均値と大学での GPA との関連が薄いことは, 指定校制推薦入試区分においては, 入学者の大学での学業成績はその所属した高等学校の水準に左右され, 同じ評定平均値であっても学力的には大きな差のあることを示している。

表 2 入試区分別就職志望先

	保育職		公立小 教員	その他	合計
	公立	私立			
併設校制	17 42.5%	11 27.5%	4 10.0%	8 20.0%	40
指定校制	20 46.5%	14 32.6%	5 11.6%	4 9.3%	43
推薦計	37 44.6%	25 30.1%	9 10.8%	12 14.5%	83
一般 A	32 59.3%	9 16.7%	5 9.3%	8 14.8%	54
一般 B 他	17 58.6%	2 6.9%	3 10.3%	7 24.1%	29
一般計	49 59.0%	11 13.3%	8 9.6%	15 18.1%	83
合計	86 51.8%	36 21.7%	17 10.2%	27 16.3%	166

進路選択に関しては、国公立大学受験者の受け皿となるような入試区分「一般 B 他」による入学生は私立保育園・幼稚園への就職を避ける傾向があることが見出された。更に、学業成績との関連をみると、公立園を志望する学生より私立園を志望する学生の方が高等学校での学業成績を示す評定平均値が高い傾向が見られた(竹内, 2020)。

本研究対象学生の入試区分別の3年次年度末における進路選択状況も表2に示すように同様の傾向である。

3 新入生アンケートから見た将来設計・職業観

本稿においては、入学時のアンケート調査から学生の将来志向に関する項目に着目し、卒業後の進路選択を中心に4入試区分の学生の特徴を抽出したい。

3.1 アンケートの設問項目

調査対象学部の属する大学では、入学時に学生の種々の特性を把握するために記名式アンケートを実施しており、その結果を入学後の学修指導や進路指導を含む学生指導、学生募集のための入試広報活動などに活かしている。記名式であるために入学後の学修状況や就職活動、卒業後の進路選択などと関連付けることが可能であり、本稿ではこれを利用して調査対象学生の入試区分ごとの将来設計や職業観の違いと進路選択との関連を検証する。

実施しているアンケート内容は多岐にわたるが、ここでは学生の特性を見る指標として大学生活における活動志向と将来設計に関する次の3つの設問(設問番号及び項目番号は便宜上付与、[]内は報告者注)の回答を分析する。

【設問 A】大学入学後、以下の活動についてどの程度力を入れたいと思いますか。[各項目 4 段階選択肢による回答]

- a1: 大学での専門的な勉強
- a2: 大学での資格取得のための勉強
- a3: 大学での公務員などの試験対策準備
- b1: クラブ・サークル活動
- b2: 社会活動(ボランティア, NPO など)
- b3: 友達との交際
- b4: アルバイト

【設問 B】あなたは将来の目標(生き方;生活設計)を決めていますか。[下の4選択肢より1つ選択]

- (i) はっきり決めている
- (ii) 漠然と考えていることがある
- (iii) まだ考えていない
- (iv) 考えたことがない

【設問 C】あなたは、どのような働き方をしたいと考えていますか。結婚・出産などを踏まえたライフプランについて [下の6 選択肢より 1 つ選択]

- (1) 結婚せずフルタイムで働く
- (2) 結婚・出産後も変わらずフルタイムで働く
- (3) 結婚・出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後フルタイムで働く
- (4) 結婚・出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートで働く
- (5) 結婚・出産後ずっと専業主婦
- (6) その他

3.2 大学生活における活動志向

3.1 節に挙げた【設問 A】の回答を大学生活における活動志向の指標とする。この設問は各項目について

- ・とても力を入れたい (4)
- ・やや力を入れたい (3)
- ・あまり力を入れようと思わない (2)
- ・まったく力を入れようと思わない (1)

の4段階のいずれかを選び回答する。回答は上記のポイントで集計される。大学での学修活動への志向の強弱を尋ねる項目 a1, a2, a3 と大学在学中の社会活動への志向の強弱を尋ねる項目 b1, b2, b3, b4 についてポイントの合計(項目 a については最大 12 点, 項目 b については最大 16 点)で各入試区分の学生の志向を比較する(表 3, 表 4)。

学修活動への志向性(表 3)については、3項目すべてに最大限の努力を目指す回答(12 点満点)が多い中で、推薦入学生は一般入学生と比べて明らかにポイントの低い(11 点以下)学生の多いことが分かる。特に「併設校制」は 10 点以下が 2 割以上を占める。入試

表 3 入試区分別学生志向(学修活動)

	12	11	10	9	無回答	合計
併設校制	19 47.5%	10 25.0%	6 15.0%	3 7.5%	2 5.0%	40
指定校制	26 60.5%	16 37.2%	1 2.3%	0 0.0%	0 0.0%	43
推薦計	45 54.2%	26 31.3%	7 8.4%	3 3.6%	2 2.4%	83
一般 A	43 79.6%	7 13.0%	2 3.7%	1 1.9%	1 1.9%	54
一般 B 他	21 72.4%	4 13.8%	1 3.4%	2 6.9%	1 3.4%	29
一般計	64 77.1%	11 13.3%	3 3.6%	3 3.6%	2 2.4%	83
合計	109 65.7%	37 22.3%	10 6.0%	6 3.6%	4 2.4%	166

表4 入試区分別学生志向 (社会活動)

	16	15	14	13	12	11	10	9	無回答	合計
併設校制	3 7.5%	6 15.0%	12 30.0%	10 25.0%	2 5.0%	5 12.5%	0 0.0%	0 0.0%	2 5.0%	40
指定校制	5 11.6%	5 11.6%	12 27.9%	9 20.9%	4 9.3%	6 14.0%	2 4.7%	0 0.0%	0 0.0%	43
推薦計	8 9.6%	11 13.3%	24 28.9%	19 22.9%	6 7.2%	11 13.3%	2 2.4%	0 0.0%	2 2.4%	83
一般A	7 13.0%	9 16.7%	7 13.0%	14 25.9%	9 16.7%	4 7.4%	2 3.7%	1 1.9%	1 1.9%	54
一般B他	2 6.9%	6 20.7%	6 20.7%	5 17.2%	7 24.1%	2 6.9%	0 0.0%	0 0.0%	1 3.4%	29
一般計	9 10.8%	15 18.1%	13 15.7%	19 22.9%	16 19.3%	6 7.2%	2 2.4%	1 1.2%	2 2.4%	83
合計	17 10.2%	26 15.7%	37 22.3%	38 22.9%	22 13.3%	17 10.2%	4 2.4%	1 0.6%	4 2.4%	166

している。入試区分別のポイントの平均は推薦入学生が13.44、一般入学生が13.39とほぼ同じであるが、ポイントの最頻値を見ると一般入学生が13点(平均3.25点)であるのに対し、推薦入学生は14点(平均3.5点)である。推薦入学生は一般入試学生に比べてやや活発な活動を望んでいる者が多い一方でポイントが11

区分「併設校制」の入学生は、系列大学に進学することが高校在学中の目標であって、大学卒業後の進路選択や生活設計を視野に入れていないどころか入学する学部を選択すら重視せず学修意欲が高いとは言えない場合も少なからずある。その実情を反映した結果とみてよい。一方、同じ推薦入試区分である「指定校制」では、3項目すべてに最大限の努力を目指す4点と回答した学生は約6割と少ないが、全員が少なくとも1項目には4点と回答していることも分かる。

社会活動への志向性(表4)については、4項目すべてに4点と回答した学生は1割程度と少ないが、すべての項目に3点以上(合計12点以上)の回答をした学生は8割に上る⁴⁾。各項目の平均ポイントはb1, b2, b3, b4の順に3.2, 3.2, 3.8, 3.3であり、どの項目にもある程度力を注ごうと考えていることが分かるが、中でも友達との交際は8割強の学生が4点と回答

点以下と低い学生も一定数いることが分かる。

3.3 将来設計とライフプラン

入学時点で将来設計をどの程度決めているか(将来設計の意識レベル)を問う【設問B】の入試区分別回答数が表5である。入試区分による差は殆ど見られない。いずれの入試区分の学生も約3割は「(i) はっきりと決めて」おり、「(iii) まだ考えていない」者は1割に満たない⁵⁾。強いて言えば一般入学生の方がはっきり決めているものが多く、「併設校制」の学生は意識がやや曖昧といえる。

卒業後のライフプランに関する【設問C】は、女子学生にとって人生の重大な転機となる結婚と出産を経てどのような将来像を望んでいるのかを問うものであり、その回答を表6にまとめる。将来保育関係の仕事

表5 入試区分別将来設計意識レベル

	(i)	(ii)	(iii)	(iv)	無回答	合計
併設校制	11 27.5%	24 60.0%	3 7.5%	0 0.0%	2 5.0%	40
指定校制	15 34.9%	25 58.1%	3 7.0%	0 0.0%	0 0.0%	43
推薦計	26 31.3%	49 59.0%	6 7.2%	0 0.0%	2 2.4%	83
一般A	19 35.2%	31 57.4%	2 3.7%	0 0.0%	2 3.7%	54
一般B他	11 37.9%	14 48.3%	3 10.3%	0 0.0%	1 3.4%	29
一般計	30 36.1%	45 54.2%	5 6.0%	0 0.0%	3 3.6%	83
合計	56 33.7%	94 56.6%	11 6.6%	0 0.0%	5 3.0%	166

表6 入試区分別ライフプラン

	(2)	(3)	(4)	(5)	無回答	合計
併設校制	6 15.0%	18 45.0%	10 25.0%	4 10.0%	2 5.0%	40
指定校制	7 16.3%	17 39.5%	19 44.2%	0 0.0%	0 0.0%	43
推薦計	13 15.7%	35 42.2%	29 34.9%	4 4.8%	2 2.4%	83
一般A	6 11.1%	25 46.3%	17 31.5%	4 7.4%	1 1.9%	54*
一般B他	3 10.3%	11 37.9%	14 48.3%	0 0.0%	1 3.4%	29
一般計	9 10.8%	36 43.4%	31 37.3%	4 4.8%	2 2.4%	83
合計	22 13.3%	71 42.8%	60 36.1%	8 4.8%	4 2.4%	166

注) 入試区分「一般A」54名のうち1名が(1)と回答した

に就くと見込まれることもあり、入学時に既にかなり具体的なイメージを持っているようである。結婚・出産を機に一旦退職し子育てが落ち着いた後に再就職を想定している学生が8割程度おり、保育士あるいは幼稚園教諭の実情に関する知識があると思われる。推薦入学生の方が一般入学生より結婚・出産後もフルタイムで働くことを望む者が多い。また、結婚しないで働くという選択肢は保育職を目指す学生には殆どないことも分かる⁶⁾。

将来設計の意識レベルとライフプランのクロス集計が表7(無回答5名除外)である。表は行がライフプランの別、列が意識レベルの別を表す。理論値(表8)と比較すると明らかなように意識レベルとライフプランとに顕著な関連性は認められない。すなわち、どの程度将来設計を意識していたとしてもどのようなライフプランを選択するかには影響しないと言える。

表7 将来設計意識レベルとライフプラン

	(i)	(ii)	(iii)	(iv)	合計
(1)	0	1	0	0	1
(2)	9	12	1	0	22
(3)	27	40	4	0	71
(4)	18	37	5	0	60
(5)	2	4	1	0	7
合計	56	94	11	0	161

表8 将来設計意識レベルとライフプランの理論値

	(i)	(ii)	(iii)	(iv)	合計
(1)	0.3	0.6	0.1	0.0	1
(2)	7.7	12.8	1.5	0.0	22
(3)	24.7	41.5	4.9	0.0	71
(4)	20.9	35.0	4.1	0.0	60
(5)	2.4	4.1	0.5	0.0	7
合計	56	94	11	0	161

注) 小数第2位を四捨五入しており合計は整数値にならない

4 活動志向・将来設計・ライフプランと進路選択

2.3 節で入試区分別に就職志望先を見たが、本章では学生の活動志向や職業観が3年次末の就職志望先の選択とどう関わるかを観察する。

4.1 活動志向と進路選択

就職志望先の大学生活における活動志向との関連は表9、表10である。これらの表ではアンケートに無回答の4名を除外した。学修活動に関しては保育者養成系本来の職業選択をする学生と比べるとそうでない学生の積極性の低いことが分かる。一方で結果的に保育

職ではなく小学校教諭を目指した学生は2項目以上でとても力を入れたいと回答している。社会活動への志向性に関する表10は2ポイントずつ合わせた表示とした。学修活動と同様、その他の進路を選択した学生は積極性が低く、小学校教員を目指した学生は入学時より意識が高かったことが分かる。

表9 就職志望別学生志向(学修活動)

		12	11	10	9	合計
保育職	公立	63 75.0%	16 19.0%	2 2.4%	3 3.5%	84
	私立	22 61.1%	8 22.2%	6 16.7%	0 0.0%	36
公立小教員		12 70.6%	5 29.4%	0 0.0%	0 0.0%	17
その他		12 48.0%	8 32.0%	2 8.0%	3 12.0%	25
合計		109 67.3%	37 22.8%	10 6.2%	6 3.7%	162

表10 就職志望別学生志向(社会活動)

		16-15	14-13	12-11	10-	合計
保育職	公立	23 27.4%	41 48.8%	18 21.4%	2 2.4%	84
	私立	11 30.6%	16 44.4%	7 19.4%	2 5.6%	36
公立小教員		4 23.5%	10 58.8%	3 17.6%	0 0.0%	17
その他		5 10.0%	8 32.0%	11 44.0%	1 4.0%	25
合計		43 26.5%	75 46.3%	39 24.1%	5 3.1%	162

4.2 将来設計と進路選択

表11(無回答5名除外)を見ると将来設計の意識の高さが保育者養成系本来の職業選択に直結しているわけではないが、入学時点で将来を「(iii) まだ考えていない」学生は保育者とは異なる進路選択をする割合が高い。将来を「(i) はっきりと決めている」学生は公立保育職や公立小学校教員を目指す傾向が強い。

表11 就職志望別将来設計意識レベル

		(i)	(ii)	(iii)	(iv)	合計
保育職	公立	34 40.5%	45 53.6%	5 6.0%	0 0.0%	84
	私立	11 31.4%	23 65.7%	1 2.9%	0 0.0%	35
公立小教員		7 41.2%	9 52.9%	1 5.9%	0 0.0%	17
その他		4 16.0%	17 68.0%	4 16.0%	0 0.0%	25
合計		56 34.8%	94 58.4%	11 6.8%	0 0.0%	161

4.3 ライフプランと進路選択

ライフプランと進路選択の関係をみると、保育職志望学生は結婚・出産後子育てが落ち着いた後に「(3) フルタイムで働く」という回答と「(4) パートタイムで働く」という回答がほぼ同数であるが、公立小学校教員志望の学生は入学時点からフルタイムでの働き方を望んでいたことが分かる（表 12、無回答 4 名を除外）。

表 12 就職志望別ライフプラン

		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	合計
保育職	公立	0 0.0%	12 14.3%	37 44.0%	32 38.1%	3 3.6%	84
	私立	1 2.8%	3 8.3%	14 38.9%	15 41.7%	3 8.3%	36
公立小教員		0 0.0%	3 17.6%	10 58.8%	4 23.5%	0 0.0%	17
その他		0 0.0%	4 16.0%	10 40.0%	9 36.0%	2 8.0%	25
合計		1 0.6%	22 13.6%	71 43.8%	60 37.0%	8 4.9%	162

5 まとめ

保育者養成学部（コース）の学生について入試区分ごとの特性を、卒業後の進路選択と学業成績との関連に着目して見た研究（竹内, 2020）に引き続き、本稿では入学時アンケート調査における学生の将来志向に関する項目に着目し、卒業後の進路選択と関連させて入試区分ごとの学生の特徴の抽出を試みた。

大学生活における活動志向に関しては、推薦入学生は一般入学生と比べて学修活動への志向性が弱く、特に併設校制推薦入学生は意識の低いものの割合が高いことが認められた。一方で社会活動については推薦入学生の方が活発な活動を望む傾向があるが、意識の低い学生も一定数含まれる（3.2 節）。

入学時の将来設計に関する意識レベルは、一般入学生の方がはっきり決めており、併設校制推薦入学生はやや曖昧であった。ライフプランに関しては推薦入学生は一般入学生より結婚・出産後もフルタイムで働くことを望む傾向がある。将来設計の意識レベルとライフプランの選択志向に関連性は認められない（3.3 節）。

これらの特徴と進路選択との関係をみると、保育職・教職以外の進路を選択する学生は活動志向に積極性が見られない場合の多いことが窺える。将来設計に関する意識の高い学生は公立保育職や公立小学校教員を目指す傾向が強く、公立小学校教員志望となった学生は入学時からフルタイムでの働き方を望んでいた（4 章）。

併設校制推薦入学生の特性は、彼女らにとって系列大学に進学することが高校在学中の目標であって、大

学卒業後の進路選択や生活設計は重視していないことに起因していると推察される。それでも最終的には卒業後に多くが保育者となることは、学部教育が効果的に実施されていることを物語るものであろう。

注

- 併設校制推薦入試とは当該学園の有する系列高等学校からの推薦枠である。
- 一般入試と大学入試センター試験利用入試は試験時期の違いにより 2 月初旬実施の A 入試と 3 月初旬実施の B 入試とがある。それぞれの入試は試験科目数により複数の教科型に分かれている。
- 「一般入試 A（プラスセンター型）」受験者は、大学独自試験を「一般入試 A（2 教科型）」受験者と同様に 2 科目受験し、事前に受験した大学入試センター試験の高得点科目をそれに加えた 3 科目の合計点により合否判定する複合型入試であり、大学入試センター試験を課す国公立大学との併願受験に適している。国公立大学の下位に位置する私立大学では他の入試区分よりも受験者の学力レベルの高いことが多い。
- 厳密には 4 項目の回答の組み合わせが 4, 4, 3, 1 であっても 12 点であり、このような学生も含まれるが、実際には 4, 3, 3, 2 あるいは 4, 4, 2, 2 のような組み合わせである。
- 入学時に「まだ考えていない」学生が 1 割程度と少なく「はっきり決めている」学生が 3 割以上あるのは教員養成系学部だけでなく、調査対象学部が属する大学の管理栄養士養成や看護師養成などの資格系学部の大きな特徴であり、他方で語学系や経営系の学部では「はっきり決めている」学生が 1 割程度で「まだ決めていない」学生が 3 割程度となる。
- 表 6 には表示していないが「一般 A」区分に 1 名「(1) 結婚せずフルタイムで働く」と回答した学生がいた。大学全体としては 5% 程度の学生がこの選択肢を選んでいる。

参考文献

- 林寛子 (2012). 「入学区分別にみる学業成績と生活態度と卒業時の意識」『大学入試研究ジャーナル』 **22**, 79-84.
- 石井秀宗 (2012). 「推薦入試の経年分析——志願者の動向及び学業成績の検討」『大学入試研究ジャーナル』 **22**, 35-42.
- 石井秀宗 (2014). 「推薦及び一般入試の受験者層の推移に関する検討」『大学入試研究ジャーナル』 **24**, 35-40.
- 石井秀宗 (2017). 「入学区分と卒業後の進路との関連」『大学入試研究ジャーナル』 **27**, 49-54.
- 竹内聖彦 (2019). 「私立大学教員養成学部における入学区分と卒業後の進路との関連」『大学入試研究ジャーナル』 **29**, 23-28.
- 竹内聖彦 (2020). 「私立大学保育者養成系学部における入試区分と卒業後の進路の関連」『大学入試研究ジャーナル』 **30**, 105-111.